

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.798 2020

2020年7月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



OPINION

傷ついても希望を失わずに
わが国で起きていることへの考察

北米YMCA同盟 会長 ケビン・ワシントン

今、アメリカで起きていることに対して、私はとても苦しい思いをしています。私自身が過去に体験していることでもあるからです。ジョージ・フロイドが無用の死という残虐極まりない仕打ちを受けた映像と、それに続くミネアポリスや他の都市で起こった抗議活動を繰り返し見て、私は過去の記憶がフラッシュバックしました。この50年間、何が変わったのだろうと問わざるを得ません。しかし、ひとつだけ大きな違いがあります。警察の残虐性や、構造的な人種差別に対して、「“黒人”の命が大切なのだ」と声高に唱えてデモ行進をするのが、“黒人”だけでなくあらゆる人種やエスニックマイノリティの人々のネットワークであり、そのほとんどが若者だ、ということです。

悲しくて、やりきれなくて、怒りと恐怖を持ちながらも、私には希望がないわけではありません。

アメリカが直面している課題は、ますます意味深く、大きくなっています。アメリカは建国の時からこの問題を抱えていますが、若者の決断力の方が力強いでしょう。現在の若者世代は、アメリカの歴史の中で数の多い世代というだけでなく、もっとも多様性に富んでいます。

YMCAの仲間の考えや祈り、ふりかえりにふれて、私の気持ちは高揚し、多くの気づきを与えられています。ある者は怒り、ある者は心配し、ある者は混乱しています。しかし同時に、真の変化を起こすために辛抱強く、力を蓄え、貢献しようとしています。私たちは立ち上がり、公正と正義のために声をあげなければなりません。

私たちはこの国の潮目を変えるために大きな、そして大胆なアクションに取り組んでいます。若者と協働することを目的とした組織として、また、若者にとって意味のある活動をサポートする組織として、COVID-19パンデミックのさなかにあってもできることはたくさんあります。この数か月の間、物理的につながることができなくても、コミュニティの中の格差を埋めようとポジティブな行動をとるために連帯することができるのだ、ということをYMCAは繰り返し見せてくれました。

YMCAには信頼と力があります。包摂性と若者に対して、組織として捧げる光を道標としなければなりません。私たちの魂に炎を、心に希望を持って進みましょう。私たちの望む未来を創造するために力を合わせましょう。



ケビン・ワシントン
Kevin Washington
北米YMCA同盟会長

2015年より北米YMCA同盟で最初のアフリカ系アメリカ人の会長。
1978年にフィラデルフィアYMCAクリスチャンストリートブランチのユースプログラムディレクターとしてYMCAのキャリアをスタート。
1995～2000年 フィラデルフィアフリーダムバレーYMCA、シカゴYMCAスタッフを経て、1995年よりシカゴYMCA事務局長。
2000～2010年 ハートフォードYMCA理事長。在任中、60億円を投資して8つの新しい施設とキャンプ場を展開した。
2010～2014年 ボストンYMCA理事長。在任中、会員の多様性、理事会へのコミットメントを増大させ、コミュニティのニーズを反映した幼児期教育の展開を行い、数千人の子どもや家族がYMCAに参加した。

安全に配慮したつながりの回復の姿

YMCAは地域で暮らす人びと、特に子どもとご家庭に伴走し、緊急事態宣言下でも「**#はなれていてもつながっている**」ことを呼びかけ、多様な取り組みを行ってきました。

全国各地での活動再開にあたり、すべての活動において感染症対策を進めるとともに、一人ひとりが生活を維持しながら予防し、誰もが公平に夢をかなえるチャンスのある、公正な社会の創造にチャレンジしていきます。

今号では、専門家による意見を伺い、子どもの現場で起こりうる不安を解消し、今後のYMCAの取り組みを考えます。



岩室紳也さん
公衆衛生医
ヘルスプロモーション
推進センター代表



桜井智恵子さん
関西学院大学人間福祉
研究科教授



田口努
日本YMCA同盟総主事
(進行)



高橋祐子さん
仙台YMCA
仙台YMCA幼稚園園長



木村成寿さん
熊本YMCA
みなみセンター 館長／
ぶどうの木幼児園 園長

現場からの
質問者

新型コロナウイルスを知る。どうしたら感染しない？

座談会を始めるにあたり、公衆衛生医である岩室先生より新型コロナウイルスについてお話を伺いました。

感染を予防するために一番大事なのは、ウイルスが目と鼻と喉の粘膜から侵入することを知ることです。つまり、ここに近づけなければいいのです。ウイルスは空中で飛んでいるものもあれば、どこかに付着したものもあります。飛んでいるのが体内に入るのを飛沫感染とエアロゾル感染、どこかに付着したものに触って、体内に入るのが接触（媒介物）感染といえます。

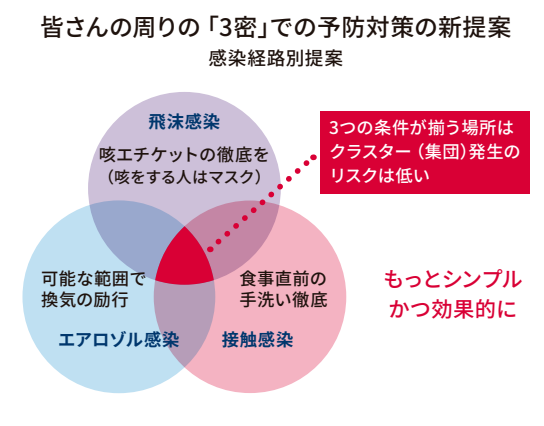
接触感染が一番多いのは食べ物からです。たとえば、素手でサンドイッチを触れば、もちろんサンドイッチにウイルスがつきます。それを食べるとサンドイッチがウイルスを喉まで運ぶ。

次に、感染予防の話です。マスクは飛沫が飛ぶのを防ぐことで他の人にうつさないようにするためには、効果があります。エアロゾルは空気中を漂い、マスクと顔の隙間から入るので、完全な予防は難しいです。飛沫やエアロゾルは最後はどこ

かに落下し、接触感染の原因となります。接触感染で一番危ないのは、手で触る。手をきれいに洗うことです。手を洗うために、蛇口の栓を誰かが触り、それを別の子どもが触る。そうすると蛇口の栓を媒介として接触感染が起こりかねません。レバー式がいいですね。ひじでレバーを閉めればいいわけです。

マスクでも接触感染が起こります。マスクの表面を手で触ると、マスクの表面に付着したウイルスが鼻腔、口腔内へ吸い込まれます。すぐに触る子どもには、マスク着用はとても危険だと私は思っています。

「とにかくマスクと換気」と言われていますが、咳エチケットの徹底が大切です。ぜひ、ひじで受けてください。ひじに自分の飛沫がついても、ひじは他人には押し付けません。また、飛沫は2mしか飛びません。無言給食、時間差登校、フェイス



シールドでも、1時間も漂うと言われるエアロゾルからの感染は防げませんから、可能な範囲での換気の励行は重要です。

改めて「なぜ」ということを考えてみてください。ウイルスがどこからどこへ、どうやって入ってくるのかということです。接触感染が非常に危ないんです。

コロナ自粛で子どもたちにはどんな影響が？

田口 ウイルスと共生しながら、今子どもたちが置かれている、あるいは様々な方々が置かれている状況に対して、どうやってつながりを回復し、新しいつながりを構築していくのか。座談会のはじまりとして岩室先生から、ベースとなる考えを伺いました。

桜井先生には教育の視点から、お話を伺いたいと思います。

桜井 日本人は、感染する人は「自分の問題」だと自己責任的に考えやすいというデータがあります。医学上の要請や配慮が「正義」のようになっていく。日本は子どもたちも自己責任論の影響を受け、加えて、いつも自分が認められずに、「もうちょっと頑張ろうね」という名のもとに自分が否定され続

けるので、思い切ったことはしないというメンタリティが固定化しています。きちんとしなきゃ、ちゃんと消毒しなくちゃなど細かい規律を言われ続けることで、子どもたちが無気力になって、時に自責他害になるというメカニズムです。それは自分を責めて、リストカットやいじめまで引き起こす構造です。そして、**何が一番怖いかというと自分で自分を監視するようになることです。**

一方、若者たちは一生懸命頑張って仕事をしないと非正規になり、未来は暗い、と考える。そこで周囲との関係が悪かったり、親の圧力が強かったら、簡単につぶれてしまう。それがこのコロナの後、社会状況がこのままだと、若者・ユース・子どもに想定される問題です。

では、コロナ前に戻って経済開発主義のまま回復させるという大人の論理でいいのでしょうか。人

間関係の信頼まで失なわないようにしながら、子どもたちが遊びの中で育つ関係性の回復を、ゆっくり支えながら、「**あなたはあなたでいい」と、誰よりも自分が感じられるように社会的に課題化することが必要でしょう。**

これから、自粛によってもたらされる影響で一番恐ろしいことは「あなた一人の能力で頑張ろうね」という個人化が続くことです。「司牧権力」というフーコーの概念があります。自分自身はどうだったか、きちんとやっていたか、悔悟をして自分をより良くする。個人化した、自分に決められた仕事だけをするような組織にならないことが大事です。個人化しない、そこにYMCAの役割があると思います。

田口 これからの子どもたちや教育の現場、またYMCAに対してどのような期待がありますか。

Stay safe, Stay connectedを 実践するために

高橋 いつもの新学期と違い、今年は**保育よりも「まず消毒」となりがち**です。たとえば、大切な食事の時間ですが実際にどのようにしたいのでしょうか。

また、保護者の方から、子どもから死について質問されていて相談がありました。どのように伝えていったらいいのでしょうか。

最後に、自粛期間中でもできるだけ保護者の疲れや悩みを聞くようにしていました。保護者の方へのサポートについても教えて下さい。



岩室 まず食事のことですが、「この子が感染していたらどうなる」と考えてください。飛沫は1m以上飛びます。しかし食事の時にあまりくしゃみはしま

せんね。食事直前の手洗いが最優先、というふうに一個一個考えていくこと。過剰反応だなというのがわかんと思うんです。

死については、死って立ちあったり、経験してみないと分からないじゃないですか。私は医者になって一番勉強になったのは、人は死ぬという経験を重ねさせてもらったことだと語っています。

桜井 **大事なのは子どもたちの自由をどれだけ守れるか。**そのためには先生たちが忙しくないことです。日常の保育、そしてコロナの対応と、保育の現場は大変です。さらに子どもや家族のケアを上乘せせずに、できるだけ断捨離する。行事を減らすなど、先生たちがしっかり休めるようにすることで、雰囲気は柔らかくなると思います。教科書的な話ではなくて、**もっとグダグダに、もっとゆっくりしましょう。**子どもたちの間に立って、一緒にゆっくりすることが子どもや親たちを緩める、そう思います。

高橋 できないことが多い中で、できることを探すのは楽しいんです。できることを探せる自由さや、つながる大切さは常に自分の中にあります。

田口 答えのない問題に、どう向き合っていくかという力、正解はないかもしれないけれど、目の前にいる人に寄り添う力、そういう力が今こそ必要だなと思います。

木村 「つながりの回復」を目指して、スポーツ教室や学童保育に参加しているメンバーとこれから「新しい生活様式」の中で過ごしていくのですが、安全については保護者から毎日多くの意見をいただきます。安全を徹底しつつ、ある意味での「密接」という今までYMCAが大事にしてきたことを考え直す。「つながりの回復」から「安心の創出」を果たすためのきっかけや、感染症という私たちの未だ十分な経験や見識が共通化していないものへの対応に難しさを痛感しています。

田口 子どもたちは試行錯誤しながら、自分で自分を守る力を身につけていくと思うんです。行き過ぎた安全の徹底や管理ではなく、ある程度保護された中で子どもたちが豊かに生きていくような環境。親たちにそのことを伝えていかなければならないようにも思います。

桜井 毎日、大学でオンライン授業をしています。最近大学院生から、十分気をつけるから大学へ行きたいと言われました。子どもたちにしても、実は「**3密が人間社会を継続させていくもの**」なんですね。緩やかにコロナを落ち着かせながら、**勝負は子どもたちの元気さ**ですよ。大人たちが励まされる。子どもたちが元気だったら、保護者支援はいらないくらい安心して、孤立している親たちも緩んでいく。そういう元気な子どもたちの様子を見せていくことだと思います。経済的支援は必須ですが。

岩室 **3密解消で防げるのは飛沫感染**だけです。コミュニケーションや対話の一つの材料をコロナにしたらいいいと思います。コロナから逃げたり、コロナのことをもっと理解しましょうというより、

コロナでコミュニケーションを取ったらいかがでしょう。

感染症と共存する 地域社会におけるYMCAの役割

田口 最後に、これからのYMCAに必要なことの視点でお話しいただければと思います。

高橋 今だからこそYMCAができることを考えて、行動に移すことが大事だと強く感じました。コミュニティの場や、心がコロナの感染のことでいっぱいになっている保護者の方たちを少しでも楽にしたいです。そして地域にも子どもたちの元気を届けることが、私の役割なのかなと感じています。

木村 「子どもたちの元気が大人を変える」という言葉に、現場を思い返して気持ちが高まっています。「コロナウイルスに負けるな」という視点から、この感染症と上手に付き合い、地域課題を捉えながら、しっかりと地域に寄り添っていきよう、今回を機にポジティブに転換していきたいなと思いました。



岩室 今回のコロナ対策は行政や専門家に任せきりで、これだと現場が疲弊する、現場にそぐわないものになってしまう。**コロナが社会を変えているのではなくて、コロナを受け止める姿勢が社会をおかしくしている**ということに気づいて、コロナとどう向き合うのかを考えていただきたいです。

桜井 人々の活動自粛の進んだ2か月は空気も水もきれいで、子どもたちもある意味伸びやかで、不登校の子たちはほっとしていました。学校が始まって、勢いよく前のように戻っていくうちに、人々は別の意味でまた命の危険を感じていくようになるでしょう。

いろいろな子たちがそれぞれの楽しみ方で自然に触れて「**みんなそれぞれで一緒に在る**」という立ち位置こそが必要になってきます。そのような「公的な空間」が望まれているのです。YMCAはその中核になるところだと思います。

田口 YMCAも社会の大きな変化の中で役割を地域との対話の中で見だし、活動を変化してきました。こういう状況の中で新しいもの、今まであったものの良さをしっかりと見つめて、それを今の子どもたちに提供しながら、ユースたちにも学校教育や家庭では体験できない、社会とつながる場として、それぞれが生かされていく、豊かな居場所になっていくことができればなと思いました。

YMCA子ども・ユース・地域支援 ポジティブネット募金



YMCAは地域で暮らす人びと、特に子どもとご家庭に伴走し、「#はなれていてもつながっている」ことを呼びかけ、多様な取り組みを行ってきました。

新型コロナウイルスにより、感染予防をしながらも、私だけではない、いま困っている誰かのために募金を行います。

「誰もが、公平に夢をかなえるチャンスのある地域社会の創造を」。特に、未来をつくる子どもとユースのために、ご協力をよろしくお願いいたします。

誰もが、公平に夢をかなえる チャンスのある地域社会の創造を



子どもの学びや体験の機会を、公平に提供します。

ユース世代の学びと生活、将来設計を支援します。



地域のシニア世代の見守りと健康づくりを進めます。

心ない偏見を生まないよう予防活動を展開します。



YMCAの諸外国の先進的事例を取り入れ、感染症対策を進めます。

すべての人に新しい健康づくりを提唱し、心と体、精神にわたる免疫力を高めます。



医療、保育、介護、流通等の
地域の生活を支える方々を支援します。

子どもとご家族に伴走し、子どもの成長について
保護者とコミュニケーションを図ります。



募金期間 2020.6.1～2021.3.31

目標金額 全国YMCAにて3億円



募金の詳細につきましては、お近くのYMCAまでおたずねください。

YMCA will continue its efforts to create the community where no one is left behind to realize his/her potentials through the following actions;

To provide the opportunities of learning and experience for the children.



To support learning, daily life and future planning of the youth generation.



To promote the watching over and maintaining health of the senior generation in the community.



To implement preventive activities to avoid mindless prejudice. (prejudice from lack of understanding)



To incorporate the good practices of YMCAs overseas and promote the measures against infectious disease.



To advocate health promotion and enhance immunity in spirit, mind and body of all.



To support the people who sustain the community infrastructure such as health care, childcare, elderly care, distribution and so on.



To accompany children and their families and communicate with them about the growth of their children.



Resilient YMCA | 世界YMCA同盟が提唱する、「困難な状況のときに、課題を柔軟に受け止め、コミュニティのために互いに支え合い、助け合うことを通して、道を切り開くYMCA」のこと。

「#はなれていてもつながっている」キャンペーンでは、日本に暮らす外国人、世界の仲間たちに向けて多言語で発信していきます。



募金はこのように使われています

暴力下にある女性が安心して過ごせる場所として

在日本韓国YMCAでは4月以降、日本YMCA同盟と連携し、企業からの寄附を得て、困難な状況におかれた10代～20代女性たちの一時滞在場所として、ホテル客室と食事の提供を行いました。

この間、新型コロナウイルス感染拡大防止のため「ステイホーム」が叫ばれる中、家族やパートナーからのDV、虐待、暴力を受けるといった社会問題がより深刻化しています。また、SNSで見知らぬ男性に連絡を取り、泊まる場所を確保するために身を危険にさらす女性が増えています。居場所がなく経済的に困窮している若者たちは、ネットカフェやファミレスで夜を明かすこともあり、店の時間短縮や休業によって、さらに居場所を無くしている状況です。

このような事情を抱えた女性たちの受け入れを行うのは、私たちのYMCAでは初めての経験でした。受け入れにあたって困惑することやこれまで知らなかった厳しい現状に胸を痛めました。ですがYMCAのホテルがなすべき役割として、女性たちが安心して過ごせるように検討を重ねました。宿泊した女性からチェックアウトの際に感謝の言葉をいただいたときには、むしろ私たちが励まされました。

長引く自粛による疲労がたまる中、「#はなれていてもつながっている」キャンペーンが多くの方々に元気を与えています。一方で、「安全のためにはなれている私たち」は無意識のうちに、安全ではない状況で働く方々や、安全を奪われている方々を、「私たち」から疎外してしまうおそれがあります。社会から弱く、小さくされている方々の現状を知り、一人ひとりが困難な状況にあるいまこそ、「ポジティブネット」のある豊かな社会を創造していきたいです。

在日本韓国YMCA 高彰希